
うちの女王様

冴川明希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウチの女王様

【Nコード】

N9789D

【作者名】

冴川明希

【あらすじ】

一般人からみた跡部景吾と、氷帝レギュラーからみた跡部景吾についての考察。跡部がオウジサマだなんてとんでもない。忍足視点のギャグ。

1 (前書き)

テニスの王子様の二次創作。別名で友人に捧げたものを改稿したものです。

我が氷帝学園には物凄く華やかなオウジサマがいらっしやる。

彼は中学生でありながら跡部様と様付け呼ばれ、それを当然の如く受け止める器の持ち主だ。

彼がオウジサマと呼ばれるにはワケがある。生まれ乍らに備えた気品、それを裏切らぬ家柄に加え圧倒的なカリスマ性と華。それらを神や天才と称される芸術家などが人間の形にしたら跡部景吾という男になったと言わんばかりの美貌と肉体。

因みに彼は頭の出来も抜群で、まあ呆れる程に恵まれた奴である。

そんな奇跡を集めた様な男は運動神経も発達していらした。スポーツだけでなく芸術関係など、何をやらせても卒なく人以上にこなす辺り天才なのだろう。歌わせれば音楽教師に惚れ込まれ、絵を描かせればコンクールで金賞でも獲ってくるといった始末だ。

神はどこまでも彼を愛されたようである。これだけ揃えば夢見る乙女達にオウジサマと呼ばれても文句はあるまい。

彼は現在、その恵まれた肉体と運動神経をテニスというスポーツに傾けている。才能を持つ者が努力すれば当然素晴らしい結果を残すのが常だが、彼もまた例外では無かった。

彼のプレイには彼同様、見る者を思わず魅了する華がある。

しかしテニスを通じて知り合った人間は兎も角、初対面の人間は大抵彼の言動に、退く。

今や氷帝の常識である『俺様、何様、跡部様』は、やはり一般的では無い。彼に心酔する者達も最初から酔っていた訳ではない。いくら外見が麗しかろうと、プライドの高さをそのまま体现したかのよくな物言いに好感を抱けと言う方がどうかしている。

しかし、だ。

彼のテニスを観てしまうと駄目だ。

乗り気でなかった者達までが、いつの間にかフェンスにのめり込む様にして熱くなっている。彼のプレイのあまりの迫力と華麗さに人々は酔うのだ。そうならばもう彼の自信に溢れた台詞も派手過ぎるパフォーマンスマスも気にならない。むしろ酔うにはもってこいの空間を、彼自身が演出して下さるのだ。

気付いた頃には、誰もが完璧な跡部信者になっている。

容姿だけでも騒がれる要素を十分に満たしているというのに、テニスの腕も申し分ないと来れば数多のファンが存在するのは自然界の掟の様なものだ。彼のファンはとかく熱烈であるので有名である。まるで神を盲目的に信仰する信者の様である、とファン自らが認める位のものだ。その異様な熱烈さは校内に収まるものでなく止まる所を知らない。

彼もまた見かけによらずサーブミス精神旺盛なのか、その黄色い声に応えたりするので余計に騒ぎは大きくなるのだ。

しかしそれはあくまで大部分の一般人の目に映る跡部景吾の姿である。

テニス部員の極限定的な目で見れば、彼は氷帝学園テニス部の部長、つまり二百人を超える我々部員の首領であり、それを易々と従える女王様なのである。

忍足は部室のベンチに凭れ掛かりながら、窓の外に広がるテニスコートを眼鏡の奥から眺ていた。コートでは一年生がそろそろ準備を終えたのか、幾つかのグループに別れストレッチなどを始めている。二三年も殆ど揃っているようだ。

全開の窓からは爽やかな風が吹き込み、忍足の少し長めの髪を軽く弄る。彼はユニフォームに着替えもせず、制服のネクタイを解いたまま動かなかった。ボタンを三つ、だらしなく開けている。胸元に招き入れた風が心地良いのか、眠たそうな表情を無人の部室に晒していた。

「デメエ、何ぼけつとしてやがる」

ノブを捻る音と共に部室に足を踏み入れた男は、ベンチに凭れたままの忍足を見た瞬間口を開いた。

振り向かなくとも解る。勿論女王様のご登場だ。

忍足はわざとゆっくりドアの方に顔を振り向かせた。

「あ、跡部さん」

「跡部さん、じゃねえだろ。さつさと着替えろ。時間だ」

「はいはい」

会話する間にも跡部はさつさと自分のロッカーをがばと開け、制服を脱ぎ出している。

忍足はこれ見よがしに溜息を吐いた。跡部はそんな彼に不満そうな貌を向ける。

「さつさと着替えろって言ってんだろが。ったく…何見てやがる」

「いいやん、減るもんぢやうし」

「まあな」

「……」

あつさりと返された言葉に、忍足は自分のポロシャツに手を掛けながら、もうひとつ溜息を漏らす。

この女王様は己に向けられる視線というものに、底が無いのかと突っ込みたくなる程疎い。

穴戸辺りに言わせると見られ過ぎた結果鈍くなるしかなかったんじゃないのか、と言う事だが。

確かに男の裸だ。男同士の着替えに何の恥じらいがいるという跡部の考え方も解る。

だが、惜しげも無く晒される絶妙なラインで縁取られたその姿に、何人もの部員が妙な反応をしたのか位は気にするべきではなからうか。思わず頬を染め顔を背ける者、前屈みになる者ならまだ可愛い。強者になると部室であることを失念し、うっとりとその白い背中に陶醉する者までいる。

危険な思惑と妄想が溢れる部室で平然と跡部が着替えられるのは、ひとえに彼の鈍さ故だ。

忍足が跡部を部室で待っていたのは、彼の危なっかしさに耐えられなくなった心優しきレギュラー陣の計らいなのだ。

跡部が着替える時に誰か一人は部室にいること。

レギュラーの暗黙の了解となっているこういったルールは他にも幾つかある。

そう、跡部景吾は危なっかしいのだ。素のままの跡部を知る者に言わせれば、跡部が完璧だなどんでもない。樺地がいつも彼のキャリーバッグを持つようになったのは、跡部がしょっちゅうそれを置き忘れて来るからだ。視界が広いのか良く気の付く性なのか、おそらくその両方だと思われるが、樺地が跡部の置き忘れたバッグに気付き、持っていたのが最初だ。いつの間にかそれが定着し樺地が持つ役になってしまったただだ。つまりそれ程の回数をこなしたと言う訳である。

「オイ、行くぞ」

「あ…ちょお待ち、自分ボタン留め忘れとるで」

「あ？」

しゃあないなと言いながら忍足は跡部のポロシャツの二番目の穴に半分も引つ掛かっていないボタンを嵌めてやる。確かこの跡部のシヤツはボタン穴が少しキツイのだ。毎度の事だから、間違いない。親指の腹で押し込むと布とボタンが擦れてキュツと音を立てた。

「サンキュ」

「ええよ。ほな行こか」

ボタンを嵌めてもらうことに何の疑問も覚えず、当然の様に受け止めてしまふ辺りが、レギュラー陣にとっては頭痛の種だと言うことを跡部は知らない。

つつい跡部のフォローをしてしまふ自分達に、いつだったか穴戸が苦笑しながら言っていた。

『つい毒気が抜かれちまうんだよな』

要するに、『しゃあないな』の世界だ。

『跡部がもし完璧だったら、オレは今でもアイツの事嫌いだったと思うぜ』

穴戸の言葉に岳人も同意していた。多分それは他のメンバーも同じだろう。入学当初、穴戸は一方的に跡部を嫌っていた。忍足から見ても、穴戸が跡部に対し性格が合わない、気に入らないといった感情を持っているのがわかった。穴戸だけではなく、何だよ、あの派手な奴といった陰口は多くのやつかみと共に囁かれていた。

少しずつ時間が経ち、その間に色々な出来事があって、穴戸は漸く理解したという。

跡部には悪気がこれっぽっちも無い。

『張り合おうとするのが馬鹿らしくなっちまった』

跡部は人を馬鹿にしたような口調で喋るが、それは癖であり悪意があるのでは無い。

そうと解れば跡部は意外と付き合い易い人間だった。

跡部のスタンスは基本的に公平だ。

相手が誰であつても良いものは良いと認めるだけの度量を持っていた。そうでなければ部員間の対抗意識が強い氷帝内で、当事者である部員から絶対の信頼をされることは無かつただろう。

抵抗が薄れ、共に過ごす時間が増える程、彼らは気付き出す。

跡部は危うい。

妙な所で抜けているというのか、思わず手を貸さなければいけない気持ちになる。放っておいたらとんでもない事になるんじゃないかと思ってしまう。

勿論跡部は周囲がそんな事を考えているとは夢にも思わないだろう。彼は完璧を自負しているのだ。

その内そんな跡部に対し可愛げさえ覚え、高圧的な言葉もどこか芝居がかった動作もまあいいかと思うようになるのだ。

跡部景吾とは大したものである。

このような事が積み重なった結果、彼の周りにレギュラー陣が集まることになった。ホスト軍団の異名を取る彼らの正体は、健気な跡部フォロー隊だ。

忍足は欠伸を堪えながらフェンスに凭れ、辺りを見回す。

たかがストロークの練習でも跡部の番となるとコートの周りの温度が一気に上昇する。コートの上はまるで跡部の為の舞台だ。狂った様に跡部の名を叫ぶ女生徒達に、思わず忍足は呟く。

「ほんま、惚れた弱みっちゅうんはしゃあないなあ……」
自分も、皆も。

今日も今日とて樺地は自分と跡部の鞆を担ぐ。跡部がうつかり忘れてしまうからだ。

そして跡部の周りには内心のハラハラを上手くオブラートに包み込む術を身に付けたレギュラーが控える。女王様は彼らと共にコートを開歩し、あるいは数多の部員達に指示を飛ばす。その一挙一動に部員やギャラリーの熱い熱い視線や歓声が浴びせられる。

彼らには、侍者を引き連れたオウジサマの御成りに見えているのだ。

誰も彼もを巻き込んで、我らが氷帝テニス部の女王様は本日も絶好調である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9789d/>

ウチの女王様

2010年10月12日13時15分発行